

愛知県立看護大学の教育改革に関する調査(6)

——看護教員の本学大学院への進学ニーズ——

曾田 陽子¹, 小松万喜子¹, 川田智恵子²

A Report on Educational Reform in Aichi Prefectural College of Nursing and Health (6)

——Needs of Nursing Faculty to Study at the Graduate school of Nursing——

Yoko Sota¹, Makiko Komatsu¹, Chieko Kawata²

キーワード：大学院教育，進学ニーズ，看護教員

はじめに

医療保健福祉を取り巻く情勢が著しく変化する今日において、質の高い看護を提供できる看護職育成の必要性が高まっている。その社会的要請に応えるためには、看護学の一層の拡充を図るとともに、高い看護実践能力をもった看護職や、看護教育の充実が不可欠である。平成14年に出された「看護学教育の在り方に関する検討会」報告においても、看護教育の質の向上には、組織としての教育能力の向上とともに、看護教員個々の質の向上が不可欠であることが述べられている。このような状況下において、看護職の教育に携わる看護教員の資質向上に寄与することは、看護系大学院の重要な役割といえる。

平成17年度博士課程小委員会では、本学大学院への看護職および学部生の進学に関する意見や、本学大学院修了者の雇用に関する意見を広く調査した。本稿ではこの調査のうち、愛知県内の看護教員の調査結果を中心に分析を行い、看護教員のニーズの視点から本学大学院教育の課題を検討したので報告する。

I. 目的

本学大学院進学に関する看護教員のニーズを明らかにする。

II. 方法

1. 調査対象

愛知県内の看護系大学、専修・各種学校に勤務する看護教員353人に質問紙を配布した。なお、大学の教授、助教授と、本学教員を対象から除外した。また、県内に短期大学が1施設あるが、施設の特定を防ぐために対象から除外した。

2. 調査方法

1) 調査内容

無記名自記式質問紙により、次の内容について質問した。

調査内容：

- (1) 対象の属性：年齢，教員歴，取得免許，最終学歴，現在の職場，職位
- (2) 資格審査で認められれば，専門学校や短期大学卒業者が大学院を受験できるという資格審査制度を知っているか
- (3) 大学院への進学ニーズ：①現在の本学大学院修士課程への進学希望，②専門看護師（以下CNS）認定コース，認定看護管理者コース，助産師養成コースが設置された場合の進学希望，③博士課程が設置された場合の進学希望
- (4) ①大学院進学の場合の仕事の継続，②大学院への進

¹愛知県立看護大学（基礎看護学），²愛知県立看護大学（学長）

- 学に際して問題となること，大学への希望（自由記載）
- (5) 修士課程におけるCNS認定コース，認定看護管理者コースの設置と助産師養成コースについての意見（自由記載）
- (6) 博士課程設置についての意見（自由記載）

2) 調査期間

平成17年6月中旬から7月下旬

3) 配布・回収方法

施設責任者に調査協力依頼文書を送り，同意が得られた責任者より調査依頼文書と質問紙を，調査対象者に配布してもらった。また，インターネットなどで教員の氏名を公開している施設に勤務する教員に対しては，個人宛で，調査依頼文書を添付した質問紙を郵送した。いずれの場合も，回答用紙は対象者本人が封筒に入れて厳封し，返送してもらった。

3. 倫理的配慮

調査目的および方法，調査協力は自由意思であること，調査協力の有無によって不利益は受けないこと，無記名で個人名は特定されないこと，データは調査以外の目的では使用されないこと，および提出方法を記載した文書を質問紙とともに配布した。回答後の質問紙は回答者が封筒に入れて厳封した後，直接投函し，質問紙の提出をもって同意の確認とした。

III. 結果

質問紙の回収数は192（回収率54.4%），有効回答数192（有効回答率100%）であった。

1. 対象の属性（表1，2，3）

平均年齢は43.0±7.9歳で，教員歴は9.9±7.2年。最終学歴は専修・各種学校が91人（47.4%），短期大学（以下短大）が29人（15.1%），大学が53人（27.6%），大学院修士課程が19人（9.9%），大学院博士課程が0人であった（表1）。専修・各種学校（以下，専門学校）には専門学校卒，短大卒，大学卒，大学院修士課程修了者が勤務していたが，専門学校卒の率が高かった（表2）。大学には大学卒と大学院修了者のみが勤務していた。職場および職位では，専門学校に勤務する専任教員が最も多く，123人（64.0%）であった（表3）。

表1 対象の属性

n=192			
	平均	項目	人(%)
年齢 (歳)	43.0±7.9	30以下	8 (4.2)
		31-35	26 (13.5)
		36-40	43 (22.4)
		41-45	39 (20.3)
		46-50	34 (17.7)
		51-55	28 (14.6)
		56以上	14 (7.3)
教員歴 (年)	9.9±7.2	1-5	62 (32.3)
		6-10	49 (22.5)
		11-15	43 (22.4)
		16-20	17 (8.9)
		21-25	14 (7.3)
		26以上	7 (3.6)
最終学歴		専修・各種学校	91 (47.4)
		短期大学	29 (15.1)
		大学	53 (27.6)
		修士課程	19 (9.9)
		博士課程	0 (0.0)

表2 最終学歴と職場

最終学歴	職場		合計
	専修・各種学校	大学	
専修・各種学校	91	0	91
短期大学	28	0	28
大学	42	10	52
修士課程	4	15	19
合計	165	25	190

(無回答 2)

表3 職場と職位

職場	職位					合計
	助手	講師	専任教員	教務主任	その他	
専修・各種学校	0	0	123	24	16	163
大学	18	5	1	1	0	25
合計	18	5	124	25	16	188

(無回答 4)

2. 入学資格審査についての認知度

資格審査についての認知は，全対象者のうち，「制度は知っているが資格条件は知らない」が99人（51.6%），「制度を知らない」が42人（21.9%）であった。入学資格審査制度を利用することができる専門学校卒業生91人中72人（79.1%）が，短大卒業生29人中24人（82.8%）が，「制度を知らない」か「資格条件を知らない」と答えていた。

3. 大学院への進学ニーズ

1) 現在の本学大学院修士課程への進学希望について(表4)

本学大学院修士課程に「進学したい」19人、「できれば進学したい」81人を合わせ100人(52.1%)が進学を希望していた。

属性別の内訳を表5に示した。年代別にみると、30歳未満と56歳以上を除いた各年代において、50～60%という高い率で進学を希望していた。また、最終学歴別で見ると、専門学校卒業者51人(56.0%)、短大卒業者19人(65.5%)、大学卒業者30人(56.6%)が進学を希望していた。職位別にみると助手が3人(16.7%)、講師が0人であるのに対し、専任教員では78人(61.9%)、教務主任では12人(48.0%)が進学を希望していた。職場別では専門学校勤務者の97人(58.8%)、大学勤務者では4人(16.9%)が進学を希望していた。職歴では勤務年数が短いほど進学希望が多く、1～5年の者では37人(59.7%)が進学を希望していた。しかし、26年以上の職歴になると、再び上昇希望者率が増加していた。進学希望者100人中、70人(69.3%)が資格審査について「資格条件を知らない」あるいは「知らない」と答えていた。

2) 専門看護師(CNS)認定コース、認定看護管理者コース、助産師養成コース(以下、新設コース)が設置された場合の進学の希望について(表4)

新設コースへの進学希望者は、「進学したい」24人(12.5%)、「できれば進学したい」94人(50.0%)を合わせ118人(61.5%)であり、属性別の内訳を表5に示した。専門学校・短大・大学卒業者では60～70%が、職場においては専門学校、大学問わず50%以上が進学を希望していた。修士課程在学中または修了者であっても23人が新設コースへの進学を希望していた。職位では専任教員の69.8%が進学を希望していた。年代および職歴では、50歳を過ぎると、また職歴が20年を過ぎると希望者が約4割に減少するものの、それ以外では高い進学希望者率であった。とりわけ30代～40代前半が70～80%という高い進学希望率であった。

現在の修士課程には進学を希望しないが、新設コースには進学を希望する者が13人、逆に、現行の修士課程には進学するが、新設コースには進学しない者は9人いた。

希望領域(複数回答)をみると、がん看護領域が29人でもっとも多く、ついで認定看護管理コース25人、成人看護慢性21人、小児19人、精神、母性、クリティカルケ

表4 進学希望 (n=192)

		単位:人(%)		
修士課程	内訳	①したい	19	
		②できればしたい	81	
		③しない	63	
		④他大学修士課程に在学中か修了	26	
		不明	3	
	現在の修士課程への進学希望あり*		100 (52.1)	
新設コース	内訳	①したい	24	
		②できればしたい	94	
		③しない	64	
		④CNSコースに在学中か修了	2	
		不明	8	
	新設課程への進学希望あり*		118 (61.5)	
	希望領域 (複数回答)	CNS コース	がん看護	29
			成人看護慢性	21
			老人看護	19
			母性看護	17
			精神看護	17
			クリティカルケア看護	17
			在宅看護	14
			小児看護	9
地域看護			7	
認定看護管理者コース		25		
助産師養成コース		5		
博士課程	内訳	①したい	12	
		②できればしたい	28	
		③分野によっては	62	
		④しない	71	
		⑤他大学博士課程に在学中か修了	1	
		不明	18	
	博士課程への進学希望あり**		102 (53.1)	

* ①②を「進学希望あり」とした

** ①②③を「進学希望あり」とした

ア看護がいずれも17人、在宅看護14人、小児看護9人、地域看護7人、助産師養成コース5人であった。

3) 博士課程が設置された場合の進学希望について(表4)

博士課程への進学希望者は「進学したい」12人(6.3%)、「できれば進学したい」28人(14.6%)、「分野により進学したい」62人(32.3%)の合わせて102人(53.1%)で、新設コースの場合よりは人数が減るものの、全対象者の53.1%という依然高い進学希望者率であった。年齢では30代～40代前半が、職歴では10年以下の経験者が多く希望していた(表5)。博士課程では看護管理学、看護教育

学, 精神看護学, 在宅看護学, 家族看護学などを学びたいと記述されていた。

4. 進学する場合の障壁について

1) 大学院進学の場合の仕事の継続について (図1)

大学院に進学する場合, 72人 (37.5%) が仕事を継続すると答えていた。その内49人 (25.5%) は「勤務形態や担当授業などの調整が可能であれば」という条件付きで, 仕事の継続を望んでいた。辞職をするという32人 (16.7%) 中, 学業に専念したい意向から辞職すると答えた者が6人いたが, 残りは服務規程や, 交通事情, 仕事の調整が不可能であるからという理由から辞職を考えていた。

2) 大学院への進学に際して問題となること, 大学への希望

97人から153件の自由記述が得られた。類似する内容ごとに分類した。結果を表6に示した。

進学に際して問題になることとして, 仕事との両立の困難さが31件でもっとも多く記述されていた。また, 家庭との両立の困難さ (10件), 経済的負担 (20件), 交通の不便さ (16件) があげられていた。また, 受験や就学に関しての不安 (13件) や, 再就職への不安 (3件) もあげられていた。これに対し, 社会人学生の受け入れ体制の整備 (43件) と教育内容の充実 (14件) が, 主要希望としてあがっていた。

表5 属性と進学先別の進学希望者

単位: 人 (%)

項目		現在の修士課程	新設コース	博士課程	
進学希望者数 n=192		100(52.1)	118(61.5)	102(53.1)	
年代 (歳)	30未満	8	2(25.0)	4(50.0)	1(12.5)
	31-35	26	13(50.0)	21(80.8)	6(23.1)
	36-40	43	26(60.5)	32(74.4)	14(32.6)
	41-45	39	25(64.1)	28(71.8)	10(25.6)
	46-50	34	18(52.9)	17(50.0)	5(14.7)
	51-55	28	13(46.4)	11(39.3)	3(10.7)
	56以上	14	4(28.6)	5(35.7)	1(7.1)
最終学歴	専修・専門学校	91	51(56.0)	58(63.7)	16(17.6)
	短大	29	19(65.5)	20(69.0)	5(17.2)
	大学	53	30(56.6)	33(62.3)	13(24.5)
	修士	19	1(5.3)	7(36.8)	6(31.6)
職位	助手	18	3(16.7)	9(50.0)	6(33.3)
	講師	5	0(0.0)	2(40.0)	1(20.0)
	専任教員	126	78(61.9)	88(69.8)	29(23.0)
	教務主任	25	12(48.0)	10(40.0)	2(8.0)
	その他	16	7(43.8)	7(43.8)	2(12.5)
職場	専門学校	165	97(58.8)	105(63.6)	32(19.4)
	大学	25	4(16.0)	13(52.0)	8(32.0)
職歴 (年)	1-5	62	37(59.7)	44(71.0)	16(25.8)
	6-10	49	27(55.1)	32(65.3)	14(28.6)
	11-15	43	20(46.5)	22(51.2)	6(14.0)
	16-20	17	8(47.1)	11(64.7)	2(11.8)
	21-25	14	5(35.7)	6(42.9)	1(7.1)
	26以上	7	4(57.1)	3(42.9)	1(14.3)
入学資格	よく知っている	51	31(60.8)	35(68.6)	17(33.3)
	条件は知らない	99	51(51.5)	59(59.6)	16(16.2)
	知らない	42	19(45.2)	24(57.1)	7(16.7)

属性の数に対する率を()内に示した

図1 進学の際の仕事の継続 (n=192)

継続か否か	人数(%)	継続の方法 (人)	
継続する	72(37.5)	現状のまま	21
		調整可能であれば継続	49
		その他	1
		不明	1
辞職する	32(16.7)	辞職理由(複数回答あり) (人)	
		勤務規程	5
		地理的問題	8
		勤務形態や就業状況から困難	24
		学業に専念したい	6
わからない	20(10.4)		
無回答	68(35.4)		

5. 修士課程におけるCNS認定コース、認定看護管理者コースの設置についての意見

36人から30件の自由記述が得られた。類似する内容ごとに分類し、その結果を表7に示した。

30件中、設置を歓迎する記述が10件あった。また、設置する際のフィールドの確保(5件)やCNS等を養成するにあつたての社会への働きかけ(4件)などの提言や、履修の際の要望も記述されていた。

6. 修士課程における助産師養成コースの設置についての意見

26人から26件の自由記述が得られた。類似する内容ごとに分類し、その結果を表8に示した。

コースの設置を有意義とする意見があつた(10件)反面、設置に疑問や不要を唱える意見もあつた(3件)。あわせて、助産師養成を大学院で行う意義と意図の明確化を求める意見もあがつていた(6件)。

7. 博士課程設置についての意見

26人から26件の自由記述が得られた。類似する内容ごとに分類し、その結果を表9に示した。

早期に設置するよう、積極的な推進を要望する記述が多数を占めた。また、履修に便宜を図るよう求める記述もあり、博士課程へのニーズが高いことが推測された。その一方で、博士課程の必要性を問う記述や、博士の活躍の場があるか心配する記述もあつた。

考察

1. 看護教員の進学ニーズ

今回、調査対象となった教員の平均年齢は43歳前後で、

表6 大学院進学に際して問題になることと大学への要望(回答数97人)

項目(件数)		件数
進学する際の問題	仕事との両立が困難	31
	経済的理由	20
	交通が不便	16
	受験および就学への不安	13
	家庭との両立が困難	10
	再就職の不安	3
	その他	3
	社会人受け入れの整備:	43
	サテライトの継続、通信教育、Eラーニング(11) 就学期間の延長(7)、土日、夜間の開講(4) 託児所の開設(3)	
	学カ・研究業績だけでなく熱意もかって欲しい(3) 土日の大学、図書館の利用(2) 奨学金(1)、その他(12)	
教育内容の充実:	14	
学べる内容、博士にふさわしい教授体制(7) フィールドの確保(7)		

表7 新設コースの設置についての意見(回答数36人)

項目(件数)	件数
歓迎:	10
東海に少ないので歓迎(5)、社会の信頼になる(3) 理論だけではなく、実践も兼ね備えてこそその認定コースであってほしい(2)	
フィールドの確保を望む	5
取得した後、それが発揮できるように社会への働きかけも重要	4
教授陣の充実を望む	4
門戸の拡大を望む	4
履修の融通を望む	3

表8 助産師養成コースへの意見(回答数26人)

項目	件数
有意義である	10
助産を大学院で学ぶ意義、コースの意図の明確にする	6
不要である	6
看護の質向上につながる事なので、進学しやすいように条件を整えてほしい	1
より質の高い助産師の育成が望まれる	1
母乳栄養促進、育児技術などを研究できるとよい	1

平均勤務年数は9.9年、約半数が専門学校の出身であつた。この10年で看護の高等教育化は一気に進み、専門学校や大学の別を問わず、看護教員の質の向上も欠くことのできないものとなっている。このような情勢において、質の高い看護職養成という社会の要請に応えるためにも、看護教員が大学院進学を希望することは自然なことといえる。

表9 博士課程設置についての意見（回答数21人）

項目	件数
ぜひ早く設置して欲しい	18
門戸を広げて欲しい	3
夜間のみ開講や在学期間の延長を希望する	2
修士ほどの必要性は感じない	2
博士を持っても臨床でいかされるのか疑問である	1

調査対象となった教員のうち半数以上にあたる100人（52.1%）が、現在の大学院に進学を希望していた。修士課程に新設コースが設置された場合には、さらに希望者は増え、128人（66.7%）に及び、博士課程の場合も102人（53.1%）と半数以上が進学を希望していた。自由記述には、大学院の存在は看護の専門性を高め、質の向上を図るためにぜひ必要と考える人が多かった。このように、大学院進学に対する看護教員のニーズは、極めて高いことが明らかになった。

進学希望者の年代を見てみると、現在の修士課程が30歳代未満と56歳以上を除くすべての年代で50～60%の進学希望率であったのに対し、CNSコースなどの課程を新設した場合には30～40歳代前半を中心として、その年代の70～80%が進学を希望するという結果であった。博士課程では30～40歳代前半で、職歴10年以下の者が希望し、20～30%の進学希望率であった。このことから看護教員が、大学院進学という方法で成長をしようとしていることが伺える。しかし、若い年代の看護教員にとっての大学院進学は、専門性を高めてCNSの認定を受け、看護師としてのキャリアアップを図り、臨床で働くことを目指そうとするものであるのに対し、40歳代を過ぎると、臨床復帰のためではなく、看護教員としての資質の向上と学位取得という目的で大学院進学を考えているのではないだろうか。学位取得は、教員としての活躍の場を、専門学校から短大や大学という選択肢を広げることにもつながる。今回の調査では、統計上の有意差は出なかったものの、教員一人一人が描く将来像は年齢や学歴、現在の職場によって異なり、その将来像によって同じ「大学院進学」であっても、そこに求めるものは異なってくるということが推測できた。

2. 進学における障壁と課題

進学した場合の仕事の継続に関する回答や自由記述からは、進学意欲は高いが、実際に進学するとなると様々な障壁が存在することを伺い知ることができる。進学した場合、仕事の継続を希望する者は72人（37.5%）であったが、そのうち49人は「仕事の調整が可能なら継続する」という条件つきで、仕事の継続を希望していた。これに対して、辞職すると答えた者は32人（16.7%）で、最も多い理由（複数回答）として「勤務形態や就業状況から難しい」24件であり、「学業に専念したい」という自発的な理由は6件であった。自由記述には、進学を希望する一方で、様々な困難性に関する記述が多くみられた。たとえば、進学のためには辞職が必要となれば、学費や再就職の問題が生じること、在職のまま進学ができたとしても、仕事と家庭、大学院との両立の困難性を危ぶむ記述が少なくなかった。また、この困難性に、本学の立地条件からくる通学の負担感も加わっていた。

このような状況下において、看護教員の大学院への高い進学ニーズに応えるためには、大学にはどのような対応が求められるのであろうか。仕事の継続と、専門性の深化という看護教員の就学ニーズに応えるためには、まず社会人の入試・就学制度の拡充が必要である。現在も行われている科目等履修生制度による単位認定制度や、サテライトキャンパスによる休日の開講は好評であるが、さらに夜間の開講を望む声もあった。また、進学に意欲をもつ者が子育てに携わる年代であることから、託児所の開設や、時と場所を学生の状況に合わせて実施できるEラーニングなどへの要望もあった。加えて、看護教員の就業が平日の昼間であることから、夜間や休日の学修に備え、図書館の開館時間と曜日の検討も希望されていた。このような社会人の就学環境を整えていくことが課題であり、その進学意欲に応じてくために不可欠なのである。これまでの教育は、学生が大学の状況にあわせる努力が求められた。しかし今後は、学生の必要性に応える努力をして学修熱意を支援していくことが、求められる大学院教育のあり方なのではないだろうか。

まとめ

看護教員を対象に、大学院への進学ニーズ調査をおこなった。

その結果、以下のことが明らかになった。

1. 看護教員の大学院への進学ニーズは極めて高く、現

状の修士課程においては100人(50.1%)が、CNS養成などの新設課程になると118人(61.5%)の看護教員が進学したいと答えていた。

2. 最終学歴が専門学校の方が47%を占めていたが、入学資格認定制度についてはあまり認識されていなかった。
3. 仕事を継続しながら進学することを望んでいるが、勤務形態や就業状況から、困難であることが予測される。

4. 大学院には、社会人が就学しやすい就学環境の整備が求められる。

謝辞

調査にあたりご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

[本稿は、看護教員の調査の実施および分析を担当した教員がまとめたものである.]